

タイトル：2020年度教育セミナー（第16回）

日時：2020年9月17日（木）～20日（日）

オンライン開催

「現代サラフィー主義の思想と行動—エジプトにおけるヌール党を事例として」

米田 優作（立命館大学大学院 国際関係研究科 博士前期課程1年）

9月17日から9月20日までの4日間にわたって行われた「中東☆イスラーム教育セミナー」は、知的交流の場として、また自身の研究内容の深化や口頭発表の訓練の場として極めて刺激のかつ有益な機会であった。従来であれば東京外国語大学構内にて行われるが、今年度は新型コロナウイルス禍ということもあり、オンラインという仮想空間上に「集う」形で実施された。講師の先生方によるレクチャーや受講生発表など、いずれも興味深いものばかりであったが、本セミナーの感想は以下3点に要約される。

1つ目に、講師やスタッフの先生方の専門地域・ディシプリンが多岐にわたっており、そのため多角的視点からレクチャーや受講生報告に対する講評を受けることが可能であった、という点である。先生方の専門地域は、中東北アフリカのみならず、西アフリカ、中央アジア、東アジア、東南アジアなどと、セミナー名の通り、広く「中東・イスラーム地域／世界」をカバーしており、またそれに対するアプローチは、言語学、政治経済学、歴史学、人類学、文学、思想研究など、多岐にわたっていた。そのためレクチャーにおける問題設定や立論・議論の展開の仕方なども比較することができ、大変勉強になった。また、受講生報告に対するコメントでは、普段ディシプリンが近い人々との間で議論することが多いとなかなか着眼・着想することができないような観点からも、鋭い指摘などをいただけたという点で、他（多）分野の人々と議論をすることの意義を感じたと同時に、どのように自らの問題設定や議論を展開すれば、分野が異なる人々にも理解してもらえるのか、ということのを再考する機会にもなった。

2つ目に、様々な学問的背景を持つ院生が集うことができる本セミナーは、広く「中東・イスラーム」という領域に学問的関心を持つもの同士の研究コミュニティとして、非常に有益かつ刺激的な場であったという点である。特に、普段私が置かれている環境では「中東・イスラーム」を研究主題にしている院生がほとんどいない、ということもあり、大変貴重な機会となった。本年度は仮想空間上に「集った」ということもあり、懇親会や、セミナー発表の休みの時間で意見交換を行ったり各人の研究や問題関心について会話したりすることが従来通りにはいかなかったという点は悔やまれるものの、他の院生の研究発表などを聴くことは刺激を受ける良い機会となった。

3つ目に、口頭報告の機会を利用し報告を行い、講師やスタッフの先生方から内容的・技術的な講評を受けるという一連のプロセスは、自身の研究内容の深化や今後の研究会・学会などにおける報告や議論・質疑応答の訓練となり有益であった、という点である。自身が所属する大学院の演習という枠組みを超えて、他(多)分野の人々の前で報告を行うことは、普段からよく知る人々の間で報告を行なっていることだけでは気づくことができない盲点に気づかされるきっかけにもなり、1点目で述べた点と合わせ、非常に意義のあることであった。(今後参加を検討される方は、是非積極的に受講生発表に挑戦されることをお勧めします。)

総じて、このような刺激のかつ有益なセミナーに参加でき、大変満足しているが、提案として改善点を挙げるとすれば、次の点である。それは、過年度においてもすでに指摘されていることではあるが、本セミナーは「教育セミナー」ということもあるので、(2名の先生方からの質的調査と量的調査に関するレクチャーはあったが)、本セミナーに参加された講師やスタッフの先生方それぞれの研究の方法論やフィールドワークの手法などについて、もう少し議論・意見交換をする機会があっても良いのではないかと感じた。

末筆とはなるが、コロナ禍においても本セミナーの企画運営にご尽力くださった先生方や、FSC事務局の千葉さまをはじめとするスタッフの皆様に、改めて感謝を申し上げたい。